
サイレントストーリー

猿読み

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイレントストーリー

【Nコード】

N4246B

【作者名】

猿読み

【あらすじ】

音もなく雪がふる夜。三人の男女の不思議な話。

音もなく雪がふる夜。

暗闇が静かに僕らを包む

ボクは、キミを見失なわないように強くキミの手を握った。

キミは恥ずかしそうにマフラーに顔をしずめた。

音もなく雪がふる夜

彼が私を殺した。

彼は言った。

「大丈夫、痛くないよ」

私は頷いて目をつむった。
とても静かな夜

●

音もなく雪がふる夜

私は彼女を殺した。

私は彼女を許せなかった。別の男から何回も電話がきている。

私は彼女がバイトから帰ってきた瞬間、ナイフで彼女を刺した。

「大丈夫、痛くないよ」

■

音もなく雪がふる夜

今夜もボクは彼女に電話をする。

しかしいつも彼女はでない

こんなにボクが愛しているのに、彼女の服も持ってる。彼女の下着もはいている。彼女の靴下の匂いも毎日嗅いでいる。

なのに何でわかってくれないんだ。

しかし今夜は違った。

彼女が電話に出てくれた

ボクは言いきれない程の愛の言葉を彼女に送った。

しかし電話の向こうの相手は知らぬ男の声だった。

ボクは不安になった。

もしかして彼女の身に何かあったんじゃないか？

ボクは慌てて彼女の家に向かった。

案の定、彼女は血だらけで倒れていた。

急いでボクの家には運ばなくちゃ、彼女はボクの物だ。誰にもわたさない。

早く彼女を修理しなくちゃ

ボクは彼女の手を引き、二人でボクの家に向かった。

音もなく雪がふる夜

私は彼女を殺した後、

恐くなって逃げ出した。

気持ちを落ち着かせようと

近くの公園でタバコをふかしていた。

しばらくすると気持ちが落ち着いてきた。

顔を上げると。一人の男が何かを引きずって、歩いていた。

私は目を凝らして、その男をみてみた。

男は笑顔で彼女を引きずっていた。

私は驚きのあまり発作を起こしてその場に倒れた。

薄れゆく意識の中、私は見た。

マフラーに顔をしずめ、私を静かに睨む彼女を……

「大丈夫、痛くないよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4246b/>

サイレントストーリー

2010年12月30日08時13分発行